



8月ちとせだより

神戸YMCAちとせ幼稚園

子どもたちにとっては、楽しみであるはずの夏休みが始まります。私が子どもの頃は、朝早くから起きて虫取りに出かけ、また友だちと川へ水遊びに出かけ、お腹が空いたら家に帰ってくるといった毎日を時間がたつのも忘れて過ごしていました。確かに、そんな子どもたちの夏休みは、遠い昔の出来事なのかも知れません。そして現代の子どもたちは、予定の決まっていない時間が多い夏休みを「退屈だ」、「何をしたら良いの」、「どこかへ連れて行ってよ」と口にするかも知れません。きっと、日常の生活では毎日の決められたスケジュールの中で過ごしている子どもたちにとっては、これもまた当然のことなのかも知れません。しかし子どもは、「あれをしたい」「これもしてみたい」と止まることのない意欲があって、「飽きることなく遊ぶ」のが本来の姿ではないでしょうか。

「子どもの仕事は遊び」とは、最近あまり聞かれなくなりましたが、この言葉の意味は子ども自身が自らの意思で遊びを選び、そして工夫し、また同じ興味の仲間が集まって意見を出し合い、また刺激し合って遊びを展開していくなかで様々な成長があるということです。しかし、現代の子どもたちにとっては、与えられる課題、定められた予定が多すぎて、自ら工夫できる時間や空間や仲間が限定されている状況が多くあります。そんな中で育った若者が、自分の意志で何も決められない、生きる意欲が乏しいと評価されても、そのように育てられたのだから当然なのではないでしょうか。

「失敗をさせたくない」「何でも相談して欲しい」「子どものすべてを知りたい」そんな思いの親が多いこともまた事実です。そして、そんな風に育てられる子どもは、常に親の側の基準を意識し、自分で考えることなく、親の指示を求めるようになります。しかし、親にしてみればその方が安心だと思っているのかも知れません。

子育てとは、親が子どもを守ることだけでは不十分で、また何でも親が判断して従わせているのであれば、子ども自身が自らの人生を切り開いていく「生きる力」は培われないでしょう。そして、この「生きる力」を自ら身につけていくためには原動力が必要であり、まさしくそれが「生きる喜び」であるのだと思います。幼少期から、遊びを通して、様々な工夫をして、「自分で出来た」といった毎日の「生きる喜び」を積み重ねていくことが大切であり、また子ども自身の「遊ぶ意欲」が将来にわたる「生きる意欲」につながっていることを忘れてはならないでしょう。

長い夏休み、子どもたちには細切れの時間ではなく、「飽きることなく遊ぶ」ことが出来る時間が子どもたちに与えられることを願っています。

年主題 「あふれる愛 これからもともに」

8月主題 「やってみる」

聖句 “そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。”

(ヨハネによる福音書 20 章 19 節)